

初めて国際シンポジウムに参加して

↳ 国際老人福祉交流文化祭(於 韓国・束草市)↳

エッセイスト 近藤 節夫

一、定年退職者のために活動するNGO韓国隠退者協会

昨年一二月、韓国で開催された国際シンポジウムのパネリストのひとりとして、初めて外国で講演する機会を得た。シンポジウムは、四日間に亘って韓国の束草(ソク・チヨ)市において開かれたフェスティバル「国際老人福祉交流文化祭」行事の一環だった。

「国際老人福祉交流文化祭」は、毎年定年退職者を対象にNGO韓国隠退者協会(KARIP)が主催して開催される国際的なイベントで、今年も日米韓中四力国とモンゴルから多くの中高年齢者が参加した(残念ながら日本からの参加者は私ひとりだった)。シンポジウムは午前中いっぱいを費やして市内の高台にあるドン・ウ大学大講堂で国際色溢れる雰囲気の中で盛大に開かれた。シンポジウムには約六百人の参加者が集まり、その内六割はシンポジウム参加と自分たちの民族舞踊披露のために中国各地からやってきた中国人中高年齢者だった。

全般的にアカデミックな企画と民族舞踊の娯楽的なショーが組み合わされ、どちらかと言えば大衆的であり、それでいて真面目なテーマを抱えた中高年齢者が年に一度参加する「お年寄りのための知的なお祭り」と呼べるものだった。

今回この「国際老人福祉交流文化祭」が開催された束草市は、韓国東海岸に位置し、日本海に臨む人口約八万人の漁業都市で、地勢的には朝鮮戦争休戦ラインに程近い都市であるが、意外なことに北緯三八度線より北側に位置している[註：対照的に西海岸の開城(ケソン)工業地帯は、三八度線以南にあるが、北朝鮮領に編入されている]。

年々地球温暖化の影響を受けるようになり、地場の漁業も不漁となって町は寂れてきたと地元の人々がこぼしていた。近年はむしろ名山・雪岳山の観光基地として知られている。

この講演は、韓国内で定年退職者のために活動しているNGO韓国隠退者協会・朱明龍会長から依頼を受けた、ソウル在住の実業家・李愚伯氏から「知的生産の技術研究会」(以下「知研」)八木哲郎会長へ依頼してきたものだった。韓国内の「知研」会員でもある李愚伯氏は八木会長が戦前中国の天津市内でもとも少年時代を過ごして以来、七〇年に亘って八木会長とは親しい友人関係にある竹馬の友である。朱明龍会長はこの度の国際シンポジウム開催と外国人高年齢者の定年後の生活のテーマ採択に際して、李愚伯氏を介して日本の現状について日本人講師による講演を「知研」八木会長へ要請してきたのである。

当初八木会長から参加の意向を打診された時、テーマは韓国の定年退職者を対象に日本人高年齢者の一般的な生活実態、並びに高年齢者が老後の生活にどんな夢を描けるかという未来構想について、韓国の定年退職者の前で話してほしいということだと受け止めた。

ところが、韓国で通訳を兼ねて滞在中のお世話をしてくれることになった桂明珠さんと頻繁に連絡をとっている過程で、韓国側の希望及び真意と、私自身が相手の意向と希望だと承知した内容との間に若干食い違いがあるのではないかと次第に懐疑的になった。何度となく電話とメールでやり取りしていくにつれ、桂さん自身にも大会がどういう形で開催され、大会の目的や意図について詳細が完全には把握されておらず、若干戸惑っている節が感じられた。ただ、その時点では、まだ私なりに中期高齢者の仲間入りした自分自身の体験と人生観、特に退職後に人生をエンジョイしながら夢を膨らませるアイデアやプランについて話そうと考えていた。

しかし、韓国の高齢者の現実の生活は日本人以上に厳しく、退職後もチャンスにさえ恵まれれば、いつまでも働いていたいと切実に考える退職者が多いということが分ってきた。現実には定年退職者が楽しい夢を描けるような明るい話ではなく、退職後も日々の生活に追われているという深刻な実態を捉えて、彼らの今後の生活に役立てられる実例やヒントを、日本の実情から話してほしいというのがKARRPの望んでいる話だということが分ってきた。日本の実態と日本の具体的な高齢者対策を日本人講師から直接聞きたいというのが本音だったのである。

二、講演の心構えと準備

参加することを承諾してから、出発までの約一ヶ月間は韓国の主催者(KARRP)側に二度までも講演内容の梗概とレジュメを送付して、その講演内容を摺り合わせていった。この間、講演内容の確認と講演の成功のために、久しぶりに資料を取り寄せて七〇歳の手習いならぬ勉学に勤しむ日々を送ることになった。高齢者問題については、断片的に初歩的知識は理解していたが、これまで総合的なテーマとして考えて専門的に研究しているわけではない。一素人に過ぎない自分が僭越にも、難問山積のわが国の高齢者問題を話そうとしているのである。しかも受講者は日本の高齢者問題に興味を抱いている外国人である。日本の実情をしつかり、正確に話さないと誤った情報を伝えてしまう。そんな気持が久しぶりに意欲的な勉学に向かわせた。

幸い学生時代に社会政策のゼミを専攻していた経緯もあって、労働問題に精通する多くの知人、友人に恵まれていることが救いだった。その中に、麗澤大学国際経済学部で教鞭をとる旧知の下田健人教授がいた。労働問題に詳しい下田教授に相談していくつかの資料を提供してもらい、それを基に何とかパワーポイントに使用するスライドの資料を作りあげることができた。また、後に記すようにスライド上の英語表現についても、同じくNHKその他で翻訳家としても活躍し「知研」会員でもある遠藤靖子さんにお知恵を拝借して、アメリカ人パネリストからも分りやすいと誉めてもらった英語版スライドを作成することができた。それらの資料を桂さんに送付した結果、徐々にではあったが桂さんと意思の疎通と合意を形成することができた。

しかし、最初は与えられた時間内で一方的に考えを述べる講演会だと考えていたところが、桂さんからシンポジウム形式で行われるということも聞いた。講演者というより実際はパネリストとして日本の実情を説明し、その後他のパネリストと討論するスタイルだと確認できたのは、まさにシンポジウム前夜のことだった。

スピーチ時間の配分等についてもまだ主催者側と調整する必要があった。シンポジウムに割けられる全体の時間が高々二時間程度しかないということが判明した。土壇場へ来て何とか全体像のイメージが描け、理解できたわけである。

三、講演の準備とスピーチ内容の検討

実は資料作成については、事前に送付した私の講演のレジюмеについて、お互いの考え方に隔たりがあったために主催者側が全面的に理解し納得できるものではなく、彼らの事前の検討会の結果一部内容の修正を求められ、それを受け入れることにしたのである。スピーチについては、予めパワーポイントを使用して説明したいと要望していた。それはいかに通訳が的確に翻訳しても、ある程度現場でビジュアルでストレートに私の考え方を伝えてもらう方が受講者の理解は手っ取り早いと考えた。当初パワーポイントの日本語版スライドを作成したが、ほとんど日本人の参加者が期待できないとの判断から、八木会長のアドバイスもあつて英語による表現に切り替えることにした。これによりグラフや数表が、日本語版よりずっと受講者の理解に役立ったのではないかと思っている。

テーマは「定年退職者の日本の現状とこれからの高齢者の生き方」と題して、英語では「The Today, s State in Japan of the Retired Persons & the Way of Future Life for the Seasoned Generation, と表現した」。

講演がシンポジウム形式になったことから、制限時間内で充実した内容をよりメリハリを効かせてアップビルさせるために、冗長な表現や説明をするより、速い切り替えでできるだけ手短な表現の繰り返しにしようという説明と通訳方について桂さんと考え方を統一した。

「」ついで、何とかこちらの考えている論旨を受講者に伝えられるのではないかと確信したのは、当日の朝になってからである。まったくぐっつけ本番といっても良かった。

パネリストは私のほかには、韓国在住が長いアメリカ赤十字社韓国代表クリス・ヴァイア氏、中国人民大学老年学研究所・姜向群氏、韓国人ジャーナリストの四人だった。コーディネーターは主催者である韓国隠退者協会・朱明龍会長が長い在米経験を生かした流暢な英語と母国語・韓国語を駆使してその大役を務めた。開会に先立ち、東草市副市長が歓迎の祝辞を述べられた。

四、中国人受講者が圧倒的

当日十一月八日朝、指定の宿泊先から主催者手配のバスで会場のドン・ウ大学に着いた時、

まず驚いたのは、事前に全受講者の六割が中国人と知らされた通り彼らの姿が目立ったことだった。そしてそのことが開催直前になって小さなトラブルをもたらすことになった。本番直前になり主催者の朱会長から、日本語と韓国語だけでやっても六割の参加者はよく理解できないので、中国人通訳をアテンドするから会場内の中国人のためにも日・韓・中国語の三ヶ国語で説明してもらえないかとの唐突な要望が出されたのである。プログラムで予定されていない突然のハップニングに一瞬当惑し、どう対処すべきか迷った。しかし、よく考えてみると確かに参加者の半数以上に理解されないのでは、折角日本で準備した資料を熱を込めて説明してもあまり意味がないのではないかと考えて、桂さんと相談のうえ、その要求を受け入れることにした。介在する通訳者がひとり増えることにより、当然私の話す時間が短くなり、伝える内容もある程度割愛せざるを得ない。限られた短い時間の中で、中国人女性通訳を交えて急遽打ち合わせすることになった。事前に桂さんと合意して、できるだけ短い表現で具体的な説明をしようとしていたが、更に簡潔な言葉で表現することを改めて確認しあつた。主催者側では打ち合わせ時間を考慮してくれて、当初三番目に予定していた私のスピーチを最後に回してくれた。

五、スピーチ内容と反響

会場で配布されたシンポジウム用B5判六〇頁からなる立派なレジュメと梗概を見ると、私のハングル・テーマの隣に「日本の隠退層の現況と生活方式」と簡略化された日本語が付されていた。

前日になって二五枚から一四枚に削った。パワーポイントのスライドを映しながら、①世界的な少子高齢化傾向、②韓国社会を襲う世界一の高齢化現象、③定年と再雇用の基本的課題、④高齢者雇用安定法、⑤日本人サラリーマンの平均年収、⑥日本人高齢者の平均月額年金、⑦日本の大手企業サラリーマンの定年退職後の生活(D社の例)、⑧定年退職後の楽しみ、等々について私なりの解釈と考え方を述べ、それを桂さんが韓国語へ、そして中国人通訳が中国語へ素早く翻訳してくれた。

「この中で日本の現状については、受講者の中から⑤⑥⑦に格別に高い関心が寄せられた。私自身の韓国に関する知識は浅薄だったが、②に関してインターネットを通して入手した韓国中央日報紙・申成温記者のレポートをグラフ化することによって分りやすく解説することができた。日本が世界最高年齢社会である現状と、それが二〇五〇年には韓国によって取って代わられるとの韓国人ジャーナリストのショッキングな報告は、会場をどつとどよめかせた。韓国の人たちのみならず、中国人にとっても恐らく初めて知る思いがけないニュースであるとの印象を深めた。

受講者はみんな熱心に耳を傾けてくれ、スピーチが終っていくつかの質問を受けることになった。質問には日本では国家が市町村単位の高齢者団体行事のために資金を援助してくれるかとか、高齢者のイベントに国が記念品のような品物を贈るといったことはあるかと尋

ねられた。中国人も韓国人も私の口からどんな素晴らしいプランが話されるのか、しばらく注視された。彼らにとつて日本人が得る金額の多さと高齢者雇用安定法施行に見られるように、正否はともかく日本の年金制度が充実しているとの理解から、夢のような支援がなされるだろうとの期待だった。私には当初質問の意味がよく理解できなかったが、しばらくして「特別に高齢者だからということ」で社会保障、年金のほかには政府の補助はない」と応えた。この回答にほっとしたように笑いがこぼれた。

私が説明した内容では、年金、或いは現役世代の年収、定年退職後の高齢者雇用安定法の採用等は、中国や韓国の人々にとっては羨ましいものであるに違いない。それは、外貨交換レートによる現実感の差にもよるが、経済的に発展している日本の現状から推して、日本では収入に恵まれ、高齢者は国の高齢者政策によりきちんと整備され保護されていると受け取られていたようである。しかし、普段の生活の中で何くれとなく支援や、補助を施してくれる中国や韓国の国家政策のような現場の対策が日本では成されていない現実にほっとしたようでもあった。彼らがそう考えた背景には、彼らの生活の周囲にわが国では及びもつかない国が手を差し伸べてくれる種々の施策があるからである。

例えば、この「国際老人福利文化交流文化祭」の運営費用は、韓国政府が相当部分補助してくれるという。またサークル活動やイベント開催に対して国が補助金を出してくれるとも中国人参加者は語ってくれた。さらに韓国では六五歳以上の高齢者に対して国鉄運賃は三割引だそうだが、ソウル市内を走る地下鉄では六五歳以上の高齢者は無料であると聞いて仰天した。こんなに高齢者にとつて現実的にメリットのある政策はそうあるものではない。それが、何と韓国人だけに限らず外国人にも適用されると知った。実際私は韓国人の税金によつて賄われる高齢者対策の一環である地下鉄無料乗車の恩恵に浴することになった。韓国人の度量の広さに驚くとともに、高齢者に対するかゆいところに手が届く国家政策は、日本ではあまり施されていないのではないかと感じた。

幸いにして、桂さんと中国人女性、二人の通訳の優秀な能力のお陰で、シンポジウムがうまく進んでいるなどという感触はあった。桂さんとの呼吸がぴったり合いテンポが良かったことと、手前味噌ではあるが、パワーポイントのスライドが割合分りやすく理解されやすかったと思つている。桂さんと中国人通訳が話している間に、隣席のヴァイア氏に英語で内容を伝えると英語版パワーポイントを通してかなり内容を理解していて、大変分りやすい解説とスライドだとお世辞を言つてもらつたくらいである。

取り立てて嬉しかったのは、束草からソウルへ戻るバス車内で主催者の朱明龍会長から桂さんを通してお礼とお褒めの電話をもらったことである。朱会長から四人のパネリストの中では、私の説明内容とパワーポイントのスライドが分りやすくて一番良かったとお礼とお褒めの言葉をもたらした。

シンポジウムがうまく進んでいるとの感触は、受講者の表情や、会場内の空気からある程度肌を感じていたが、桂さんも以心伝心で感じていたらしく、私の世話役を引き受け、事務局との連絡など雑務も合せると相当疲れているのではないかと気になっていたが、いつも笑

みを湛えて応えてくれた。

万雷の拍手の内にシンポジウムが閉会となると、パネリストとコーディネーターが互いに駆け寄り肩を叩きあい、固い握手を交わして互いの健闘に敬意を表した。私もデイスカッションを終えて心地よい疲労感に浸った。桂さんと私は気持が高揚して、互いに抱き合って握手を交わした。その時このシンポジウムのパネリストとしての役割を無事終えることができた。何とか八木哲郎会長と李愚伯氏のご期待に応えられたとの安堵感を覚え、同時に、役者としてのわれわれのステージは成功したと確信することができた。その気持は桂さんも同じだったようである。舞台から降壇しても多くの参加者に取り囲まれ、中々会場の外へ出ることができなかった。

その後、主催者が仕立ててくれたバスで東草市立体育館へ移動し、各国・各地・各民族の民族舞踏大会を観劇することになった。シンポジウムで一度顔を覚えられたことで、翌日のホテル出発までの間多くの人から声をかけられたり、プレゼンテーションが良かったとお褒めの言葉をいただいたり、挙句には食事の際一緒に写真を撮らせてほしいという申し出があり、すっかり有頂天にさせられた。

私にとっては初めて外国における主役の経験であったが、慣れないながらも多くの人たちの協力をいただき、何とか所期の目的は果たすことができた。自分自身にとっても良い試練であり教訓でもあり、高齢者について学ぶ千載一遇の機会を与えてもらった。

六、大会の評価と反省

出発前には大会のスケジュールや、全体像がよく理解できず、定年退職者を対象とするごく普通の講演会と勝手に考えていた。参加を依頼されてからシンポジウム当日まで、僅か一ヶ月余りの準備期間では、時間的にも決して充分とは言えなかった。その点では満を持して日本を発つたというわけではない。

しかし、話のポイントはある程度整理して見当がついたので、自分なりに計画概要の作成と言及するポイントは準備していた。それでもなお不安は消えず、やはり事前に具体的な話を聞くことができないということは、正直に言っておアポケットに入ったような気分だった。現地では桂さんから説明を受けて初めて理解したり、納得することがほとんどだったが、その中で献身的にお世話してくれた桂さんには感謝の気持ち以外に言葉もない。誠実に講演成功のためにも精一杯努めてくれ、年下である私を常に「先生」「先生」とたててくれた。ソウル金浦空港到着時の出迎えに始まり、その二日後にソウルを離れるまで、いつも行動をともにして何くれとなく気を遣ってくれた。恐らく桂さんの甲斐甲斐しく、かゆいところに手が届くような心配りがなかったならこうはうまくいかなかったのではないかと思う。

桂さんは世界遺産の見学に興味を抱いていた私の気持を汲み取ってくれ、タイトな時間の中でソウル到着の日に世界遺産「宗廟」へ案内してくれた。ソウル市内の巨大なバスセンターから高速道路を走る東海岸までの4時間半のバスの旅は、国内線航空機で移動すること

もできたが、敢えて朝鮮半島の内陸部を横断することによって、韓国という国を全身で感覚的に知って欲しいと考えたのだと思う。バスの旅は本当の韓国を知るうえで素晴らしい旅となった。これも桂さんの心憎いばかりの気配りと演出のお陰である。時恰も真っ赤な紅葉の最盛期を迎えていて、日本の田園地帯を走っているかのような幻想と錯覚に捉われた旅は、やや疲労感を覚えていた身体を充分癒してくれるものだった。

桂さんとともに、シンポジウム参加者に日本の高齢化社会の現状を正しく理解してもらうということに腐心したが、考え抜いて検討した割には幾多の反省点もある。言い足りない点は時間の制約もあり、やむを得ないものであるが、翻つてもう少し丁寧な注釈や、文言を補足すべきだったと反省点も多かった。

省みて最大の反省点は、物価水準や貨幣価値、外国為替交換レート等についてあまり深く触れなかったことである。度々引用したグラフ上の金額数値は、米ドルで表示(便宜上「一米^{ドル}＝一〇〇円」で換算)し説明した。わが国でトップクラスの高給企業と言われる民間テレビ局及び総合商社社員の平均年収一、五〇〇万円(『PRESIDENT』誌〇八年一月一七日号)をそのまま「一五ミリオン^{ドル}」と置き換えたことは、平均日本人の収入(主要四、〇〇〇社の平均四三七万円、上場企業平均六六八万円)とともに日本人サラリーマンの収入が実感以上にかなり高い印象を与えたのではないかと考えている。

更に六〇歳の定年後に「高齢者雇用安定法」(二〇〇六年四月施行)の導入によって、年金を受け取れる六五歳までの雇用(または再雇用)が保証されることになり、その後六五歳になって公的年金月額平均一六万三千円が確保されることは、普通の中国や韓国の人たちが彼らの日常生活の実感から考えて、その金額の多さとともに制度自体がわれわれの感じ取る理解や感覚より以上に高い評価を受けたものではないかと考えている。

また、高い物価、思わざる予想外の出費が必要とされる日本人の日常生活および費用について補足説明すべきだったかも知れない。今にして思えば現在日本人年金受給者世帯(夫婦二人)の月額平均支出額が約二五万円であるということ、ひとり当たりの国内総生産(GDP)の比較表を提示することは、より公平な判断のためにもやはり必要だったと反省しきりである(二〇〇七年IMF統計:・アメリカ力四五、七二五^{ドル}、日本三四、二九六^{ドル}、韓国二〇、〇一五^{ドル}、中国二、四八三^{ドル})。

しかし、準備期間不足や、専門的知識の欠如等を考えてみれば、これらの反省点はある程度仕方がなかったとも思っている。その中で良かったことや、印象的なことの方が遥かに多かった。二九年前に初めて韓国を訪れた時はまだソウル市内に地下鉄はなかった。今やソウル市内は大きく変貌した。だが、日本の原風景を髣髴とさせる懐かしい田園地帯は、心ふるさと呼んでもいい郷愁を感じさせてくれた。韓国の人たちの中にも、また古き日本人の面影を見た。シンポジウムを終えてみると胸の中は爽やかな気持で満たされている。参加して本当に良かったとの満足感でいっぱいである。

帰国当日東草市からソウルへ戻ってきて、李愚伯氏から桂さんともども食事に招かれ労をねぎらってもらった。この貴重な体験を自分自身の今後の講演活動に活かしていくと

もに、中期高齢者入りした自分自身のためにも、もっと高齢者の生活と福祉について勉強しなければいけないと痛感した次第である。